

## I-Tの先駆け

TRINNC社長の高柳眞は、テレビの父として知られる高柳健次郎の遠戚に当たる。学生時代から好奇心旺盛で、理想主義者。ベンチャー経営者の資質は備わっていたと言える。しかし、高柳を本当の意味での経営者に育てたのは、過去の苦い経験や挫折だった。

# 勝つ

中小企業のものごと

高柳は静岡大学大学院を修了し、地元のヤマハ発動機に就職した。しかしヤマハ発動機の開発部門は当時、機械工学系が主流。得意の電気技術を生かせないことに物足りなさを感じ、わずか1年半で退職を願い出た。

「本格的なコンピューターシステムの導入に協力してほしい」と上司に慰留され、いったんは思いとどまったが、8年後にシステムを完成。役割を果たすと未練なく、ヤマハ発動を去った。

## 光ファイバー

退職後、すぐに地元の特

## 中小企業のリスク痛感



本初の世界初の本格的な車載ファクス製品化した

に乗ると、親会社から「次は小型ファクスをやってくれ」と依頼された。当時のファクスは大型で高額だったため、小型な廉価版を開発すれば必ず家庭に普及するとの目算だった。高柳は早速、製品化に取り組み、1号機は世界初の本格的な車載ファクスとして、ドイツ車「ベンツ」に搭載された。しかし、この事業には大きな落とし穴が待っていた。ファクス販売のため米国に設立した現地法人の幹部が、大量の商品とともに行方をくらまし、会社は巨額の損失を被ってしまったのだ。

## 起業への情熱

「思えば、親会社に小型ファクスの話を持ち掛けたところから高柳は「会社は誰のものか」「株主とは何か」と考えるようになり、「経営者として会社を起したい」との思いが強まった。孤高の技術者は

「思えば、親会社に小型ファクスの話を持ち掛けた

経営者の顔へと変わり、修羅場を経験したたくましさ

# 孤高の技術者 経営を学ぶ

と起業への情熱が後の「TRINNC」設立へとつながった。  
(敬称略)